

アムスルだより

No.17 1996年 1月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



珍しい泳ぐエビ

あけましておめでとうございます。
お正月におめでたい話題ということで、
今回はちょっと変わったエビについてお
話しましょう。

エビ類は世界で2千種以上が知られていますが、この中には穴に入ったり砂に潜ったりせず、一生涯を水中を泳いで過ごす遊泳性のエビが200種ぐらいいます。いずれも体長が1~5cmくらいの小さなエビです。しかし、泳ぐエビの中には、年間の漁獲高が32億円にもなるサクラエビや、中国・東南アジアで2万トン以上が水揚げされるアキアミといった重要な種もいます。

昨年からの研究所の調査で、阿嘉港の近辺にイソサクラエビの一種(学名シコネラ・イネルミス)がいることがわかりました。これまで日本では西表島でしか見つかっていない、珍しい泳ぐエビです。体が透明で全長2cm余りのこのエビは、泳ぐエビの特徴である、体の2倍以上もある長い2本のヒゲ(第2触角)を持っていて、これを体の両側になびかせて優雅に泳ぎます。

しかし、イソサクラエビの仲間には、第1~第3歩脚によく発達したハサミがあって、底生生活をするエビによく見られる特徴をも備えています。事実、阿嘉新港で採集されたエビは、明るいところで観察していると、水槽の底の砂の中に潜ってしまいました。どうやらこのエビは昼間は砂の中で暮らしていて、暗くなると泳ぎ出すという習性をもっているようです。

皆さんがよく知っているクルマエビやサクラエビは、どちらも同じクルマエビ下目に属します。クルマエビは、日中は砂に潜っていて、夜間も底近くで餌を採ります。一方のサクラエビは、昼間は深いところにいて、夜になると水面近くに上がってきますが、常に水中を遊泳しています。イソサクラエビは両者の中間的な性質を持っていると言えるでしょう。彼らは、底生生活から水中を泳ぐように、生活のスタイルを変えていった遊泳性エビ類の進化や適応の過程を、私たちに示してくれているのかもしれない。

イソサクラエビには、まだ科学的にわからないことがたくさんあります。とれた記録がまれなことであって、どのあたりまで分布しているのかも知られていませんし、いつどこで産卵して、

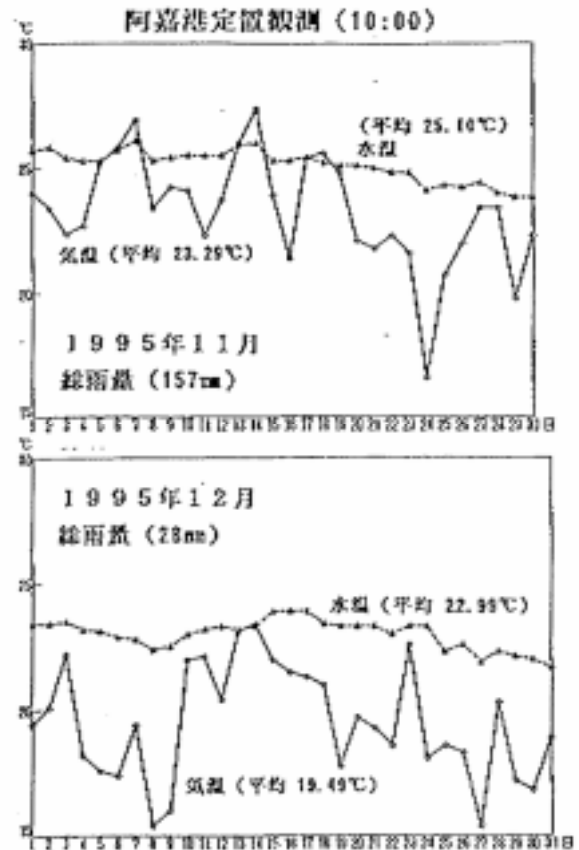
どのくらい生きているのか、そして何を食べているのかも明らかにされていません。たくさんの謎を秘めた生き物なのです。活動の盛んな夏の夜、港の水面に光を当てて待ってみましょう。明るさに誘われて集まってきたいろいな生物の中に、ヒゲの長いイソクラエビを見つけることができるかもしれません。

阿嘉島の海より

-今年の干支のネズミ騒動-

研究所 1 階の天井裏に最近ネズミが入り込み、バタバタと走り回っています。クーラーの配管をかじるなどの悪さをするので、粘着式のわなをしかけたところ、アツと言う間に 6 匹ものネズミがとれました。体長 10 cm ~ 20cm で、いずれもしっぽの長さが体長よりも長いことと、耳が大きくて毛が生えていないことなどから、クマネズミであることがわかりました。「ネズミ算式」という言葉もあるくらいに、ネズミはとても繁殖力がおう盛です。研究所に現れたネズミが大小さまざまであるところを見ると、次々と子供を産んで増えているのかもしれない。

座間味島や阿嘉島では、農作物を食い荒らすネズミを駆除するために、数十年前にイタチを放したことがありました。座間味島ではそのイタチが増えて、孵化したばかりのウミガメの仔ガメを襲って食べているそうです。阿嘉島でも海岸にイタチのものらしい足跡が見つかっています。ウミガメの被害を見つけた方は、研究所へお知らせ下さい。



-国際ホエールウォッチング

・フェスタ '96-

今年もまた慶良間の海にザトウクジラが訪れる季節となりました。7 日の日曜日には、阿嘉公園の展望台からも豪快なブリーチングを見ることができました。座間味村では、豊かな自然を通して得る感動を多くの人と分かち合おうという主旨で、「国際ホエールウォッチング・フェスタ '96」を開催します。「世界のホエールウォッチング展」や「海の映画祭」のほか、3 月 8 ~ 10 日には「国際ホエールウォッチング・フォーラム」として、世界各国のクジラの専門家を招いての講演会や交流パーティーなどが行われる予定です。皆さん、ぜひ参加して下さい。

(座間味村役場・大城晃氏より)